

國學院大學学術情報リポジトリ

〔書評〕 小田勝著 『百人一首で文法談義』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 浅田, 徹, Asada, Toru メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000734

〔書評〕

小田勝著

『百人一首で文法談義』

浅田 徹

小田勝氏は文法研究者として、古典作品の本文はどう解釈されるべきかを検証して来られた方であると存じます。教育の場面で遭遇する文法的な問題に対しても、豊富な実例によってわかりやすい指針を示して来られました。『実例詳解 古典文法総覧』（和泉書院）を座右に置いている教員・研究者は少なくともないのでしょいか（評者もその一人です）。このたび刊行された本書は、「百人一首を用いて文法について語る」という著者年来の志が実現したものであるとこのことです。著者は和歌の解釈に精通しておられ、和歌研究者である評者も、日頃より教えられることが多いと感じています。文法には不案内です。書評者としては不適格だと思えますが、学ばせて頂いたことを中心に記させて頂きます。なお、本書は親しみやすい

デス・マス体で書かれていますので、本書評もその文体で書くことにしました。

和歌も文ですから、基本的には一般の散文と同じ文法的分析ができるはずですが、しかし評者を含め、和歌研究者はそういうことが苦手です。「苦手」とは、いま目になっている現象を、類例を踏まえて解析する力がないということです。そうした解析力は、常に文法を意識しながら読むという姿勢と、長年の経験の蓄積に拠らなくては身に付かないでしょう。

本書は、百人一首の百首を、まさに一字も漏らさず文法的に分析し尽くしています。文法的な解釈が問題になっている33番「久方の光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ」の「らむ」の用法などにはもちろん詳しい言及があります（北原保雄氏説を引きます）が、この歌ではむしろ「春の日に」の「に」の分析に、素人としては驚きを覚えました。評者などには何となくこれが逆接に見えるわけですが、著者は、これが時間を示す格助詞に過ぎないことを指摘し、かつなぜそれが逆接のように働かかを説明しています。いかにも難しそうな箇所（この歌で言えば「なぜ」を補う「らむ」の用法）は我々でも注意しますが、こういうところが専門家でないと思えてこないことなのだと思えます。

似たような例で、90番「見せばやな雄鳥の海人の袖だにも濡れにぞ濡れし色は変はらず」の挿入的な傍線部は逆接の意を持ちますが、「こそ已然形」の形の句ならともかく、「ぞぞぞ連体形」でそういう意味になる用例が他にあるか、と聞かれたら、少なくとも評者は答えられません。著者のように即座に「緑なる一つ草とぞ春は見し秋は色々の花にぞありける」（古今集）という適例を挙げられる和歌研究者がいるでしょうか。

78番「淡路島通ふ千鳥の鳴く声に幾夜寝覚めぬ須磨の関守」の「ぬ」が連体形「ぬる」にならない理由については、和歌研究者にも知られつつあります。「幾」「いつ」のような疑問詞だけでは結びは連体形にならず、疑問の助詞「か」が付随して初めて連体形になるからです（27番「いつ見きとてか」も同じ）。しかし、36番「夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこに月宿らむ」の「らむ」も同じ理由から終止形なのだと言われると、評者などは気付かなかつたと白状せざる得ません。

58番「有馬山猪名の笹原風吹けばいでそよ人を忘れやはする」で、「そよ」が現代語で「そうよ」という、yesを意味する言葉なのに、それが「人を忘れやはする」（あなたを忘れたりはしない）という否定に結びついていることについて、著者は、古典語では否定的な問い掛け（この場合では「忘れなかつたか？」）

に対して、現代語のように「いいえ、忘れません」でなく、英語のように「はい、忘れません」と答えていたのかもしれないという説明を試みています。語学研究者でなければ到底思い寄らない事柄でしょう。

さて、本書の特色の一つとして、「無助詞名詞」（49番「御垣守衛士の焚く火の」の「御垣守」のように、助詞を伴わずに置かれている名詞。「御垣守ゆ」のように表示します）について一つ一つその格機能を記述していることが挙げられるでしょう。例えば12番「天つ風雲の通ひ路吹き閉ぢよ乙女の姿しばしとどめむ」の「天つ風ゆ」は呼格（呼びかけの形、「通ひ路ゆ」は目的格となります。一首をくまなく文法的に記述しようとするためですが、そのため逆に、和歌の持つ言葉の連なりの曖昧さが可視化されてくるのが、評者にとっては興味深く思われました。

例えば18番「住之江の岸に寄る波夜さへや夢の通ひ路人目避くらむ」の傍線部は、同音によって「夜」を引き出す序詞ですが、これについて著者は、「寄る波ゆ」は「下と関係をもたないので、独立語と捉えられます」と説明します。前掲『実例詳解 古典文法総覧』には「独立語」という術語は立項されていないようですが、文の中に「独立語」があるとは、不思議な事

態だと思えます。あるいは、19番「難波渴短き葦の節の間も逢
 はでこの世を過ぐしてよとや」の「難波渴φ」は「提示語」と
 説明されています。前掲書によれば、「提示語」とは例えば「朱
 雀院の行幸φ、今日なむ、楽人、舞人定めらるべきよし、昨夜
 うけたまはりしを」（源氏物語 末摘花巻）のようなものであ
 る由です。しかし、そうした、いわば話題をまず提示しておく
 ような言い方と比べると、19番の「難波渴φ」は以下の叙述の
 主題を示しているとは言いにくく、一種の曖昧さが感じられま
 す。

25番「名にし負はば逢坂山のさねかづら人に知られて来るよ
 しもがな」の「さねかづらφ」は「目的格」と判断されていま
 す。「来る」と同音の「繰る」の目的語であるということです。
 しかし、この歌は「さね葛を手繰りたい」ということを言っ
 ているわけではありません。「かづら―繰る」は何かの叙述をな
 しているのではなく、「かづら」は「くる」ものだという言葉
 の「寄せ」、すなわち縁語として関連を持っているだけです。
 すると、「目的格」という判断には違和感があり、かと言って「独
 立語」や「提示語」とも見られませんが、やはり曖昧なもの
 とするほかにないように思われます。碁石雅利氏『平安語法論考』
 （おうふう）では、無助詞名詞の格機能を判断する際、「特に

和歌では、文法的な照応関係を形態として明示せずに、意味的
 に連関させる方法をとることもある」（225頁、傍線評者）
 と指摘していたのを想起します。

76番「わたの原漕ぎ出でて見れば久方の雲居にまがふ沖つ白
 波」では、「わたの原φ」が「漕ぎ出」だす場所を示すと見る
 と「わたの原に」の省略となりますが、著者は、「に」格の非
 表示は起こりにく、「を」格の非表示は許容されることから、「見
 れば」の対象を示す「目的格」（「わたの原を」の略）と説明し
 ます。しかし「わたの原」はわざわざ漕ぎ出さなくても見える
 ものですし、「見る」の対象は海原ではなく海の果てと考える
 べきでしょう。確かに、文法的記述の立場からは、まず通常の
 文としての分析が優先され、それでは処理しがたい所でのみ例
 外的な説明（「独立語」など）が試みられるのは当然ですが、
 逆に例外の側の整理から、和歌的構文の特性を考える方法もあ
 りそうに思いました。

何にしても、和歌研究者は係り受けを丁寧を考える習慣があ
 りませんので、本書の精密な記述を読んで、歌句の持つ機能的
 な曖昧さがよく見えるようになったと感じました。

ついでに一言申します。実は（本書評の引用とは異なり）本
 書は和歌にすべて句読点や「」を付しています。我々と歌研

究者にとっては、音数律を感じる妨げとなるので、こうした表記はかなり違和感があります。しかし語学関係の友人は「すごくわかりやすい」と言っていましたので、詩として読むのではない人には有効であろうと思います。

本書の美点は他にも（本歌取り例の掲出など。適切な例をよく探しておられます）いろいろあるのですが、紙幅が尽きました。あとはぜひ直接お読み下さい。

（A5判、三〇四頁、和泉書院、二〇二一年九月発行、定価三〇〇〇円＋税）